

2020.9

秋冬

No.111

思文閣出版

鴨東通信



A map of TREASURE ISLAND at the San Francisco Bay

GOLDEN GATE INTERNATIONAL EXPOSITION

- (1) Administration Building
- (2) Music, Plays and the Art of the Future
- (3) International Exhibition
- (4) International Exhibition
- (5) International Exhibition
- (6) International Exhibition
- (7) International Exhibition
- (8) International Exhibition
- (9) International Exhibition
- (10) International Exhibition
- (11) International Exhibition
- (12) International Exhibition
- (13) International Exhibition
- (14) International Exhibition
- (15) International Exhibition
- (16) International Exhibition
- (17) International Exhibition
- (18) International Exhibition
- (19) International Exhibition
- (20) International Exhibition
- (21) International Exhibition
- (22) International Exhibition
- (23) International Exhibition
- (24) International Exhibition
- (25) International Exhibition
- (26) International Exhibition
- (27) International Exhibition
- (28) International Exhibition
- (29) International Exhibition
- (30) International Exhibition
- (31) International Exhibition
- (32) International Exhibition
- (33) International Exhibition
- (34) International Exhibition
- (35) International Exhibition
- (36) International Exhibition
- (37) International Exhibition
- (38) International Exhibition
- (39) International Exhibition
- (40) International Exhibition
- (41) International Exhibition
- (42) International Exhibition
- (43) International Exhibition
- (44) International Exhibition
- (45) International Exhibition
- (46) International Exhibition
- (47) International Exhibition
- (48) International Exhibition
- (49) International Exhibition
- (50) International Exhibition

◆ 史料探訪 72
二条城行幸図屏風

◆ 実方葉子

◆ リレー連載(5) 先読み!ニ〇三〇年の人文科学
より広い関心に応える研究環境の実現

◆ 永崎研宣

エッセイ

世紀末フランス人がみた『日本書紀』
鳥居博士の「お洒落」と『抜記帳』

◆ 石井伸夫

◆ 平藤喜久子

◆ 佐藤雄基

日本史研究者が史料の英訳から学んだこと
—「日本史史料英訳ワークショップ」参加記—

◆ 万博学への招待
◆ 佐野真由子 ◆ 市川文彦 ◆ 増田齋

◆ てーたいむ
◆ 日常語のなかの歴史 24
やつはし【八橋】
◆ 大口裕子

佐野真由子（京都大学大学院教授）編

万博学

万国博覧会という、世界を把握する方法

7月刊行

B5判上製・五五六頁／本体八、五〇〇円

〔内容目次〕

序説・万国博覧会という、世界を把握する方法

（佐野真由子）

万国博覧会と「ピアノ」の誕生

（井上さつき）

新興産業としての七宝業と博覧会——技術と近代工芸

（武藤夕佳里）

万国博覧会とオスマン帝国人の世界観

（匿名貴彦）

渋沢栄一と万国博覧会——パリ万博（一八六七）からバオヌア平洋万博（一九一五）まで

（関根仁）

「BIE」の設立と万博の二〇世紀

（岩田泰）

国際博覧会の歴史に博覧会国際事務局（BIE）が果たした役割

（寺本敬子）

フランスと一九二八年国際博覧会条約

（増山一成）

紀元二六〇〇年記念日本万博の計画とその周辺

（白山眞理）

——一九三〇年代の国際博覧会日本展示をめぐる連続性

（増山一成）

戦時宣伝と写真壁面

（白山眞理）

——山端祥玉と一九三九年ニューヨーク万国博覧会の「躍進日本」を中心に

（白山眞理）

万博日本館にみる「展示デザイン」の変遷

（構成・執筆（執行昭彦、森誠一朗、岸田匡平）

ポストコロナ時代のアイデンティティ・ポリティクスと

万国博覧会におけるライリヒン館——一九五八—一九九二

「ラム」モントリオールの困惑——一九六七万博の日本館展示問題

（エドソン・G・カハルライン）

「ラム」モントリオールの飛翔

（市川文彦）

●特集 一九七〇年大阪万博

「ラム」大阪万博の基本理念

（清水章）

一九七〇年大阪万博の背景と経緯

（五月女賢司）

——「万国博」を考える会による章案作成の背景と経緯

（五月女賢司）

万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能になる、大きな学際的・人間学の営みである。万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。万国博覧会とは、「世界を把握する方法」なのだ。

昭和天皇と万国博覧会

リテと原爆——大阪万博日本館における科学技術展示の生成

（牧原出）

大阪万博における企業パビリオンのブループリント

（有賀暢迪）

一九七〇年日本万国博覧会における仏教的造形物の役割

（若島彰子）

一九七〇年キリスト教界における戦後主体性論争

（増田蒼）

——大阪万博キリスト教館と万博反対運動

（井上章一）

建築家と万国博覧会——EXPO70の黒川紀章から考える

（橋爪紳也）

一九七〇年日本万国博覧会の先進性と評価をめぐって——産業技術史の視点から

●世界を映し続ける万博

「堺屋太一・オラル・ヒストリー」万博に戦後史を読む——沖縄海洋博（一九七五）を中心に

（間き手（牧原出、佐野真由子）

沖縄国際海洋博覧会と沖縄観光

（神田孝治）

展示装飾業からディスプレイ業へ——大阪万博前後からの展開

（石川敦子）

万国博覧会に関する来場経験者の長期記憶

（澤田裕二）

——モントリオール、大阪バンクバ、アリスペン、愛知の万博を題材に

（ワイハ・カテルト）

「ラム」上海万博の「セヴニス・ルソ」——グローバル・アート・ヒストリーへの階梯

（澤田裕二）

万博における中国要素「レセス」

（江原規由）

万国博覧会の遺産としての博物館——夢の後始末をめぐって

（中牧弘允）

近代博から現代博への運営システム転換——一八五一—二〇一七

（市川文彦）

——表裏制・売却制・展示法に映った世界

索引 博覧会／人物

（市川文彦）

日常語の なかの歴史 24

日常語のなかで、
歴史的語源や
エピソードを取り上げ、
研究者が専門的視野から
ご紹介します。

やつはし

八橋

八橋と聞くと京都銘菓が思い浮かぶだろうか。夏目漱石も一一年前の明治四二年一〇月一六日に京都で賞味したと日記にある。形の由来は近世等曲の祖八橋検校から等とも、『伊勢物語』第九段の三河国八橋（現在の愛知県知立市とされる）から橋板ともいう。銘菓は描いて八橋がまず地名を指すのは『伊勢物語』による。平安時代前期に増補や改編を重ね成立したこの歌物語は、在原業平（八二五〜八八〇）と目される男の元服から臨終まで

を記す一二五段の本が流布する。男が自らを役立たずと思ふ。東へ下る途次に通った八橋の名の由来は、「水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋と言ひける」、つまり河が蜘蛛の手の如く八方に広がるので橋を八つ渡したためとある。ここに美しく咲く杜若を見て、同行の友が男に「かきつばた」の五文字を句の頭に置き旅の心を詠んだ歌を所望する。

から衣きつつなれにしつしましあれば
はるばるきぬるたびをしぞ思ふ

都に残してきた妻を思うこの歌に一同落涙し乾飯が

ふやけたのだった。

歌枕・八橋には『伊勢物語』が響く数多の歌が堆積し、業平の東下りは史実か不明だが八橋を訪ねる人は後を絶たなかった。菅原孝標女は寛仁四年（一〇二〇）橋の跡形なく見所はないとし（更級日記）、連歌師の里村紹巴は永禄一〇年（一五六七）旅人が杜若を引き抜き跡もないと耳にし（紹巴富士見道記）、大名茶人の小堀遠州は元和七年（一六二二）杜若はなかつたと記す（小堀遠州辛酉紀行）。

恋を重ね、友と語り、かつて仕えた親王へ変わらぬ思いを寄せる……。簡潔な本文の中に人の心のひだが描かれ、時を越え愛読されてきた『伊勢物語』は、『源氏物語』などの後世の文学、美術工芸、能など様々に展開し、日本文化の通奏低音の一つとなった。美術工芸には人物を略しモチーフのみで場面を象徴する留守模様の手法がある。杜若と橋だけでそれは八橋だ。杜若が虹色に煌めく尾形光琳作の国宝「八橋時絵螺鈿硯箱」（東京国立博物館蔵）は、側面も橋が巡って風景が立ち上がり『伊勢物語』の舞台へと心は飛ぶ。

（大口裕子・一般社団法人霞会館学芸員）

てーたいむ

万博学への招待

佐野真由子

(京都大学大学院教育学研究科教授)

市川文彦

(フランス国立社会科学高等研究院シニア・フェロー)

増田 齋

(総合研究大学院大学博士後期課程在籍)

一〇年に及ぶ「万国博覧会と人間の歴史」研究会の二冊目の成果論集、『万博学——万国博覧会という、世界を把握する方法』が刊行されました(一冊目は『万国博覧会と人間の歴史』二〇一五年刊)。本書のねらいと魅力をおうかがいます。

——書名に掲げた「万博学」とはどんな学問ですか？

佐野…一言でいうなら、万博を具体的な結節点として形成される学際的人間学である、と説明できると思っています。万博のさまざまな側面を掘り起こすことで、その向こう側に広く人間社会の営みが見えるということが、この論集のあらゆる論文に表われています。そのようなアプローチで万博を見ていくという手法を聞いたのがこの万博学です。

このことは、一〇年共同研究をやっている中で、メンバーの間で意識され、共有されるようになりました。学際的人間学という実態が、結果としてできてきたところが、学問の立ち上がり方として面白く、また研究会として誇れることだと思っています。市川…一冊目の論集刊行までを第一期とすると、第一期は八〇年代の吉田光邦先生たちの万博研究からかなり年月が経っていて、その研究史を前提としながらも、新しい感覚で万博研究を進めていこうと、いろいろな成果を持ち寄ったものでした。第二期には、人員も増え、アプローチの仕方もより多様になり、それで「万博学」ということを意識できるようになったのだと思います。

増田…私が参加したのは、最初の論集を出されたあとの二〇一七年からでしたが、その時に研究会の趣旨文を読んで、すでに「万

博学」ということを打ち出している印象を受けました。万博を素材にしながら目の前の事象にとどまるのではなく、その向こうの世界を見通す、ということにすごく共感したところがありました。

佐野.. 第一期の当初から、万博自体を終着点として研究するのはなく、それを通して人間社会の歩みを見るところが研究の新しいところとして、国ではなく人間を主役にする、学者だけでなく現場の専門家と一緒に議論すること、日本を拠点としながらもグローバルな視点を持つこと、それから、「万博の時代は一九四五年までで終わった」という定説的な見方に対して、現代の万博までを通史的に見ること、などを意識していました。それらは今日もベースになっています。そのような意識をさらに積み重ねることで、「万博学」と呼べるものにしていきたいですねと、二冊目に取り組み始めた比較的早い時期から話してはいたのですが、それを具現化できるかどうかは未知数だったんです。

増田.. 万博が学際的・人間学的結節点になりうるのは、万博自体が持っている、人間社会を総合的に映すという性格ゆえですよね。

佐野.. まさにそのとおりで、万博を最初に興した人たちが、この催事を通じて人間社会の全貌を捉えようとしたんですね。その点では一見似たものに見える大型美術展などとは根本的に性格が違うといえます。そしてその性格が、制度の細かい改変はあるものの、基本的には同一といつてよい枠組みで、一八五一年のロンドン万博以来、今日まで続いていることも重要です。現在から振り返って研究する私たちにとっては、この通史性と、原初から持つ

ている総合性とが、「万博」が世界を見渡す素材であることの必然性であり、同時に特別なところでもあるのではないでしょうか。

—— **増田さんのご専門は戦後のキリスト教史・キリスト教文学ですが、ふだんと勝手の違うところはありましたか。**

増田.. 大阪万博にキリスト教が関与することに対してキリスト教系の大学や教会から賛否の声が上がったことは、戦後のキリスト教史にとって重要な点です。そこで生じた問題は現在も続いているからこそ、どのような立場でこの問題を語ろうとしているのか、という点も問われてきたように思います。この研究会ではそうした賛否の言説それ自体も面白いという受け止め方をしてもらえたことで、客観的な対象として扱えたと感じています。

佐野.. そのような客観的な距離感を持った万博とのかかわり方が重要なのだということを、増田さんが加わってくくださったことでより共有できた気がします。

市川.. 万博そのものが社会の諸相を映す多面体といえますか、どんな研究領域の人でもアプローチしうる研究対象ですよ。

佐野.. 関係がないということはありません。万博がそういう研究対象であると確認するうえで重要だったのは、この研究会を興した当初から最も大切にしていた、「人間」を見るという姿勢だと思います。典型的には、万博を論じるとき、国名だけで終わってしまう傾向が非常な強かったのです。アメリカはこう、日本はこうと。しかし、たとえばある政策決定をしたのは単にアメリカではなく、アメリカの誰なのかを掘り下げることで、見えてくるものがある——そのような研究をこそめざしたいというこ

とで、一冊目のときは特に「博覧会の人」というブロックを作り
ました。今回は必ずしも「人」というテーマを掲げていませんが、
論集全体としてこのスタンスを共有できていると思います。

増田..キリスト教についても、大きな括りで語ってしまうのでは
なく、教派の違いなどを細かく見ていくことが重要だと思います。

市川..第一期も第二期も基本的には自由に、各自の関心のもとに
研究しているのだけれど、でも明らかに第二期のほうが共通認識
を持って、かなり問題意識を共有できたところがありますね。ア
プローチの仕方が違っていても同じような認識というか、評価が
でてるのは共同研究というスタイルによるのだと思うのです。

たとえば私と佐野さんはどちらも長期的な動向を扱ったけれど、
私は経済史、佐野さんは外交や文化というキーワードで書かれて
いる。分野や領域が違うから齟齬があってもおかしくないのだけ
れど、にもかかわらず重なる論点が多かったですね。

佐野..長く関心を共有してきた結果ですね。

増田..そこが私にとっては一般的な共同論集のイメージと違いま
した。便宜的に章立てをした感じではなく、通して読むと相互の
関係性がわかるんですね。

佐野..今回は、研究会でお互いの原稿を読みあったり、早い段階
で全体の目次案を見ていただいたりと、論集自体を一緒に作る
というプロセスも意識しました。

増田..各々のテーマは多様だけれど、万博を素材にして世界を見
通すという「万博学」の方向性は一致していたので、書きやすい
なと感じました。

■万博の制度を繙く

——本書にはいろいろな成果がありますが、BIE（博覧会国際事務
局）を研究したことは特筆すべきだと思います。

佐野..BIEという万博の統括組織があるということは知られて
いながら、研究上は不思議なくらいスルーされていたんですね。
万博の研究においてBIEを対象としたこと自体が、国際的にも
大きな成果といってよいと思います。「万博学」にとって、万博と
いう制度そのものについてきちんと明らかにすることは、やはり
抜かしてはいけないことですから。

市川..特に佐野さんの巻頭論文は、BIEにも基軸を置いて、未
開拓の根本史料を吟味し、BIEでどういう議論があつて実際の
万博行政ないし万博のシステムにどう影響を及ぼしてきたのかを
明らかにしています。こうした研究はこれからはじめてだと思いま
す。岩田泰さん、寺本敬子さんの論考も新たな到達点です。

増田..私のように七〇年の万博のことを個別的な文脈で調べよう
としたときに、そもそも万博それ自体の骨子となっているものは
何だろうと疑問に思っても参照できるものがなくて。となるとそ
こは括弧にくくった状態のまま立論しなければならなかった。だ
から本書の成果は、今後続いていく国内外の研究者に必ず参照さ
れると思います。

佐野..万博をめぐる現実の動きを見ている、近年、BIEが良
くも悪くも存在感を増しているように思います。もともと事務的
な調整の必要から始まったのが、一九六〇年代から発言力を強め
て、今となってはBIEにお伺いを立てながら万博をやっている

感じが強いですよ。あまり知られていないと思いますが、BIEはじつは十数人しか常勤スタッフがいないのです。

市川.. 正式な政府間組織なんですよけれどね。

佐野.. 純然たる国際機関でありながら、規模としては私たちの研究会よりも小さいのです。その人たちが、非常にグリップを強めている。彼らと話すと、「私たちが」万博をやっているといういい方をするんですよ。

市川.. 事務局が結局いろいろなことを組織していくのですよね。でないとな実際の万博は運営ができない。

佐野.. ですから、彼らを看板どおり加盟各国の黒子と見てしまうと、少なくとも現代の万博の実態は見えなくなってしまう。

市川.. 開催国政府から提出された文書をただ保管しているというような単なる事務屋ではない、ということですね。

■万博史の中の七〇年大阪万博



佐野氏

佐野.. 万博史を通じて近現代史を見るところという試みを私たちが続けてくる中で、重要な新しい見解として出てきたのは、第二次世界大戦が区切りではないということです。この点では先に合意して始めたわけではなく、それぞれが実証的に研究を進めた結果、一致してたどり着いたところですね。

市川.. 佐野さんと五月女賢司さんと私、かなりアプローチの仕方が違うのに、にもかかわらず共通の視角を得ました。

佐野.. これまでは当たり前のように、第二次世界大戦が転換点だと考えられてきました。

市川.. そうそう、一九五八年のブリュッセル万博で一新したと。欧米も含めて、従来は必ずしも基礎史料を見ながら研究されていなかった。今は研究水準が上がって一次史料を読むのが当たり前になったから、これから新しい発見がされて、個々の万博の位置づけが変わってくる可能性があると思います。

佐野.. こうした見解を示すことができたのは、この研究会が通史的に万博を見てきたことのひとつの大きな成果だと思っています。従来、学術的な万博史研究は一九世紀から第二次大戦前までの万博を見るのが主流で、一方、新しい時代の万博についてはそれは別の、イベント学などの対象と考えられてきたわけです。では、双方が一緒になって議論してみたらどうなのかというのが、この研究会の最初からの関心のひとつだったのですが、それをやってきたことで想定以上のものがえられたと思っています。私自身も結果として、通史論文という形で研究成果をまとめることになりました。

そのような通史の見方の延長線上で、六〇年代のモントリオール万博から七〇年大阪万博に向かっていく展開を連続的に捉えることの重要性も確認できましたよね。

——七〇年万博が万博の歴史の中でどういう位置にあったのかということとは、これまで関心をもたれてこなかったと思います。



市川氏

市川..やはり日本人は日本の中で初めて行われたということ、どうしても高度経済成長のひとつのエピソードとして語ってきたのだけど、万博の世界史という点からすると、ものすごく歴史的な意義があった。それはおそらく当時の日本の万博協会の人もあまり認識していなかったと思うのです。それが軋轢として出てき

たのが六七年のモントリオール万博での日本館展示問題です。万博誕生以来の商品見本市的なあり方が終焉を迎えていたのに、それを認識できていなかった。それで昔ながらのやり方で見本市的な出展をして批判された。欧米の万博に携わった人やBIEの関係者なんかは潮流が変わったことを意識していたと思うのだけれど、日本側は認識できていなかった。一種の文化摩擦ですよ。でもあれで痛い目にあつたので七〇年は新たな万博像を目指そうと批判されなにかたちでやることができた。

——本書には七〇年大阪万博に関する八本の論考とコラムを集めて特集を組みました。

佐野..七〇年万博を世界史の中に置いてみたというところに加えて、学術的にこれだけ多様なアプローチをまとめて打ち出すことができたのは、本書の誇りとするところです。増田さんのキリスト教も、君島彩子さんの仏教も、あるいは牧原出さんの昭和天皇も、従来

のリアルな一角とどう切り結んでいるかを明らかにした重要な成果ですし、ほかの万博についても同様の多角的な展開が可能であるはず。この特集は、「万博学」のコンセプトをとってもよい形で伝えるものになったと思っています。

増田..特集になっていて、七〇年の万博について多様な分野から学際的に参加できることが示されていて、インパクトが強いと思います。私は研究会に入ったとき、「七〇年の研究はあまり進んでいない」といわれてビックリしました。

七〇年万博は私にとっては歴史の出来事のひとつであり、よくいわれる「きらびやかなイメージ」という記憶もあまり共有できていません。そのためすでに歴史として対象化されている問題として取り組んできましたが、七〇年万博を体験された方とお話すると、世代間ギャップのようなものを感じることはあります。

市川..七〇年のことをリアルには知らないから、学問的な作法によって客観的に書けるというところはありますよ。

佐野..七〇年万博にとって、増田さんの世代がでてきたことの意味は大きいですよ。

市川..増田さんの論文の主なテーマは、キリスト教館というパビリオンの運営や反博運動ですけど、それは日本キリスト教界だけに完結した話ではないですよ。同じ時代に安保の問題もあつたし、ベトナム戦争への協力の問題もあつて、国内外で社会が激動し、いろいろな異議申し立てが行われていて、その中のひとつの出来事だったと思うのです。下手をすると日本のキリスト教界の内輪もめみたいになっちゃうけれど。



増田氏

年代・六〇年代の万博との関係とか、BIEとの関係とかも研究してみる

増田..キリスト教館は小さなパピリオンゆえに大阪万博の中ではあまり目立たない存在でしたし、確かに出展を巡る問題も内輪もめのように見える面もありました。ただ、この七〇年特集の中に自分の論考が収録されることで、キリスト教特有の文脈に加えて、時代に共通した問題があったことを示せたように思います。

佐野..本書のあらゆるところに次の研究のタネがあると思うのですが、そうした時代を輪切りにするひとつの大きなテーマになりうるのは、戦後史の中でも六〇年代、冷戦史とのかかわりですね。万博と冷戦というのは盲点だったと思うのです。大阪万博もその準備の過程から見ると、七〇年のイベントというより、六〇年代後半の文脈で読み解くべきものなんですよね。そういう意味で六〇年代の重要性が浮かび上がってきました。

市川..その点でとくに面白いのは、戦前からの長期にわたる経緯のゆえだと思うのだけど、社会主義国の一部がBIEに加盟していることです。冷戦体制になってからはソ連がコントロールして、

必要があると思います。

——研究会は今後どのように活動していきますか。

佐野..「万博学」の発展を目指すうえで、主宰者として次の仕事だと思っっているのは、いかにして研究を継承していく場づくりをしていくかということです。緩やかにつながりながら、着実な研究成果を重ねていけるような組織のあり方というのでしょうか、本書で提示するような研究をやってみたいという人が増えるような仕組みを考えたいですね。

市川..研究会で意見が出ているのは、七〇年万博の関係者へのヒアリングですね。今度の本にも堺屋太一さんのものがあります。あと、現在進行形の二〇二五年万博について、準備段階から資料や情報を整理していくということ。意識的にやっっていないと、何も残らないのではないかとという危惧があります。

佐野..この集団の次の社会的責任は何かということですよ。みんなの力で今回の成果を発信できた。と同時にある種の責任が発生したと私は思っています。二〇二五年の万博との関係では、それに対して何か直接発言するかどうかにかかわらず、この社会に存在し続けて、時流に揺るがない良質の研究をし、知識のベースとなっていく必要がある。そして、もうひとつ大切だと思うのは国際連携ですね。共同研究を一〇年続けてきて、日本における万博研究の拠点として海外からアプローチしていただける機会が自然と増えてきました。今回の本が出ることでさらなる展開につながればと思います。

(二〇二〇年七月一九日 於・思文閣)

日本史研究者が史料の英訳から学んだこと

佐藤雄基

「日本史史料英訳ワークショップ」参加記

今年六月、「日本史史料英訳ワークショップ」がZoomでオンライン開催された。東京大学の支援を受けながら各地で活動を続けてきた学術団体「歴史家ワークショップ」の青霄龍氏（東京大学大学院経済学研究科）の企画で、イェール大学のポーラ・カーティス

氏（日本中世社会経済史）を講師としてお招きした。日本語ネイティブの準備した史料の現代語訳をポーラさんが英訳し、原稿を事前配布された参加者（三〇名弱）が当日議論した。第一回目は「醍醐寺文書」の古文書、第二回目には「御成敗式目」の条文が取り上げられ、専門家の木下竜馬氏とともに私が二回目の現代語訳を担当した。ポーラさんがアメリカ東海岸から参加する都合上、日曜午前の開催となったが、世界各地から、専門も日本中世史に限らない多彩な参加者を迎え、楽しい勉強の場となった。

現在、日本史研究にも国際的な発信や国際交流が求められる状況が生じている。実際、日本史史料が新しく英訳されることで、海外の（日本学者以外の）歴史研究や世界史教育において日本史の知見が参照される意義も大きいだろう。この点で時宜にかなった企画だが、今回の経験を通じて、一方的な発信にとどまらない双方向

のメリットが日本史研究者にもあることに気づいた。

日本の日本史研究では、史料上の言葉をそのまま本文中で用いたり、「在地」・「地下文書」のように概念用語化することが一般的である。英語圏の日本史研究においても、以前 warrior government と訳されていた「幕府」を *bakufu* と表記するなど、日本語をイタリック表記で用いる傾向がある。その背景には、近代的概念を中世に当てはめることに禁欲的な現代歴史学の傾向に加えて、正確性を尊重する風潮も大きい。私は「式目」二四条と四一条を担当したが、現代語訳に苦労した。どう訳しても、原文とのニュアンスのズレが生じるからである。史料上の言葉を用いることで、こうした苦労を避けてきたことに気づいた。だが、それによって、言葉や概念の定義を曖昧に済ませてこなかっただろうか。

四一条の「奴婢」をポーラさんは、bound servant と訳した。周知のように日本中世の「奴婢」（下人）の性格規定に関しては、日本の史学史上、マルクス主義歴史学の文脈で長い論争がある。このことを考慮して、slave（奴隸）の訳語を避ける意味でも、bound（何か・誰かに縛られている）という幅広い意味の訳語を採用したのだ

ろう。だが、現代に目を向ければ、国際労働機関(ILO)や人権団
体は近年、modern slavery(現代の奴隷制)の存在を明らかにしてい
る。誰を読者として、何を議論するために英訳するのかという問
題にも関わるが、「奴隷」をめぐる日本史学史固有の文脈を尊重し
つつも、こうした新しい問題と切り結ぶために、奴隷(slavery)とい
う訳語を積極的に使う戦略もあり得ると思った。

二四条は「後家」の再婚に関する規定であるが、「所領」や「子
息」という語をめぐって議論した。「式目」はイギリスの外交官
J・C・ホールによって一九〇六年に英訳されているが、「所領」
はHef(封)と訳されていた。このように、西洋の封建制の言葉が
訳語として選択される傾向があった。戦後のアメリカの日本史研
究者はlandholding(所有地)と訳している。だが、鎌倉時代の武
士の「所領」は、地頭職のように「職」という形態をとり、土地
そのものとは限らない。そこでポーラさんは思いついてestate
income(土地からの収益権)と訳した。現代とは「権利」の形態が違
うし、その背景にある社会の仕組みも異なる。だが、説明的に長
い訳語になってしまうと、専門家以外にはまったくイメージが伝
わらなくなってしまう(この事情は翻訳に限らず、日本人学生に説明する
ときも同じだが)。ざっくりとした訳語を示して、長い注釈をつけるし
かないのだろうか。翻訳とは、それ自体比較史の研究成果として
正確性が追求されるべきなのか、それとも読者に馴染みのある訳
語を提示して、まずイメージをもってもらうのがよいのか。史料
に比べて文学作品の英訳は多く、翻訳自体が一個の文学作品とし
て評価されることもあるらしいが、古典文学の翻訳者はどうして

いるのだろうか。その経験にも学んでみたい。

二四条にみえる「子息」の語をそのまま現代語訳に利用したと
ころ、ポーラさんから「sons」と訳してよいのか。女子にも分割相
続されていたのではないのか」と質問を受けた。私は目から鱗で、
鎌倉時代の「子息」の用例を調べたところ、女子も「子息」と呼ば
れる用例があることに気づいた(男子を指す用例が多いが)。結果、「子
息」の訳語にはsonsではなくchildrenが採用された。ジェンダー
の感覚を含めて、現代日本語と地続きのようにみえていた「子息」
のような史料上の言葉が、英語によって新たに光をあてられたよ
うに感じた。

この企画のよさは、ネイティブ言語を異にする研究者たちが直
接対話を重ねながら訳語を考えるとところにある。海外の日本史
研究には長い伝統があるため、日本史用語にも一対一対応の定訳
が多い。だが、私自身は定訳を知るだけでは、何故この語が定訳
になっているのか、日本語とのニュアンスの違いなど、さっぱり
分からなかった。日本語ネイティブにとって、訳語を知ること以
上に、訳語の検討を通じて、当たり前だと思っていた自らの日本
語の世界と日本語で書かれたヒストリオグラフィーを相対化する
ことのほうが意義深いように感じられた。羽田正氏は日本の歴史
学を英語で発信することで、英語にない表現や概念を英語圏に導
入して「英語を鍛える」戦略を主張しているが(『新しい世界史』岩
波新書、二〇二二年)、それとともに、日本語ネイティブにとっても、
(史料上の言葉を含めた「日本語を鍛える」)効用が史料英訳にあるの
だろう。

(立教大学文学部准教授)

世紀末フランス人がみた『日本書紀』

平藤喜久子

激動の幕末維新时期を経て、新しい近代国家を作り上げようと苦悩し、葛藤する人々の姿をテーマにした小説に司馬遼太郎の『翔ぶが如く』（文藝春秋、一九七五～七六年）がある。国際社会にどう参入し、渡り合っていくか、そして揺れ動く国内問題をどう乗り越えていくかを西郷隆盛と大久保利通を中心にダイナミックに描いた作品だ。NHKの大河ドラマの原作にもなったので、知っている人も多いだろう。

冒頭は、のちに「日本警察の父」とも呼ばれることになる薩摩出身の川路利良かわじりよしのフランス視察のエピソードである。典型的な薩摩隼人である川路のフランス体験が、ときにユーモアを交えて描かれるが、そのなかでもとくに注目されるのが、川路が一九世紀後半のパリで出会う、風変わりなフランス人青年の話である。毎日視察団の宿を訪れる、やせた顔の青年は、「日本語を喋るという、ただそのことに無上の情熱と快感をおぼえているよう」（三二頁、頁数は文春文庫による）であったと記される。川路の洋服姿をみて悲しげな顔をし、「なぜ日本は西洋に屈してその文明を捨てましたか。残念です」（三四頁）と述べた、この「羅尼」と名乗る熱心な「奇

書生」こそが、はじめて『古事記』、『日本書紀』のフランス語訳に取り組んだレオン・ド・ロニ（Leon Lucien Prunel de Rosny、一八三七～一九一四）である。

日本最初の正史である『日本書紀』が編纂されたのは、西暦七二〇年のこと。つまり今年二〇二〇年は、編纂からちょうど一三〇〇年に当たる。

『日本書紀』は、タイトルに「日本」と冠されていることが示すように、当時の東アジアを中心とする国際社会を意識して編纂されたと考えられる。その『日本書紀』がフランス語、英語、ドイツ語といった西欧語へと翻訳されたのが、『翔ぶが如く』も描きだした明治期であった。この時期、『日本書紀』も国際的な場に紹介されたのである。

英訳に取り組んだのは、外交官として来日し、日本学者としても活躍したW・G・アストン（William George Aston、一八四一～一九一）であった。彼によって、一八九六年（明治二九）に刊行される。イザナキとイザナミの性交の場面など、わけつだと思われた部分はラテン語で記すといった点は現代の我々から見ると奇異に感じ

られるかもしれないが、現在でも唯一の英訳、全訳であり、さまざまな地域の神話を取り上げる比較神話学の分野では、今も広く活用されているものである。

ドイツ語訳を行ったのは、東京帝国大学で言語学やドイツ語、ドイツ文学を教えていたカール・フローレンツ (Carl Adolf Florenz, 一八六五～一九三九) で、一九〇一年 (明治三四) に神代巻の翻訳を刊行した。彼は「神代紀研究」で東京帝国大学から文学博士の学位も授与されており、国学の知見も踏まえつつ、神話学的な立場も取り入れたその研究もまた、アストンの英訳とともに参照されている。

では、川路たちのもとを毎日訪れた熱心な青年であったロニによる『日本書紀』のフランス語訳はというと、これがまさに「奇書」である。英訳、ドイツ語訳に先んじて一八八四年 (明治一七) に刊行された。そのフランス語訳『日本書紀』である *Kampyo-no nuki* を開くと、目に飛び込んでくるのは『古事記』の本文の横に記されたハングルの文字である。彼は、『日本書紀』を理解するには『古事記』を知る必要があるとして、『古事記』を引用するのだが、ハングルで記すのはどういふことだろうか。実は、この文字はハングルであるとともに「神代文字」である。江戸期、国学者たちを中心に、漢字が中国から渡来する以前に日本固有の文字があったという考え方があり、その文字を神代文字と呼んだ。神代文字にはさまざまな種類があり、ハングルもその一つである。平田篤胤は、『神字日文伝』(一八一九、文政二年) を著して神代文字を研究し、いわゆるハングルの神代文字は日本から朝鮮へ伝わったものだとした。ロニはこの『神字日文伝』やそのほか国学者たちによ

る神代文字の資料を入手し、読んでいたらしい。いずれにせよ一五世紀、李氏朝鮮で編み出されたハングルが古代日本の神代文字などであるはずはないのだが、ロニは素朴に国学者たちの説を信じていたようだ。さらに、神代文字で記すだけでなく、『古事記』の訓読をデーヴァナーガリー文字でも転写するという奇妙なことも行っている。どうやら彼は神代文字がインドに起源があり、それが朝鮮半島を経由して日本に渡来したと想定していたようなのである。その関連性を示すためにも神代文字 (ハングル) で記し、デーヴァナーガリー文字でも記すということを行った。彼の幻想の古代日本が詰め込まれた翻訳といえるだろう。

ロニは、文久年間の幕府の遣欧使節団による訪仏の様子を目にし、日本に心を奪われ、日本学を志したという。彼にとつての日本は、烏帽子に狩衣姿の武士たちの日本だったのである。フランス語、神代文字 (ハングル)、デーヴァナーガリー文字、さらには彼独自の漢文が入り乱れたロニの『日本書紀』である *Kampyo-no nuki* は、翻訳としての価値はほとんど認められていない。しかし、そこには失われゆく一つの幻の「文明」の姿がとどめられているということが出来るだろう。 *Kampyo-no nuki* の向こうに「その文明を捨てましたか」というロニの悲しげな顔が浮かび上がってくる。

(國學院大學教授)

山下久夫・斎藤英喜編

『日本書紀二三〇〇年史を問う』

▼詳細20頁

鳥居博士の「お洒落」と『抜記帳』

石井伸夫

研究会がはねたあとの懇親会場は、時として名刺交換会の場となることがある。参加者が広く全国から集まる大きな研究会ほどの傾向が顕著だ。五、六年前、せっかく名刺を交換するのであれば、地元である阿波の徳島らしく、また、当地出身の世界的な考古学者・人類学者であり、私自身の研究対象でもある鳥居龍蔵を偲ばせるものでなくてはならないと強く思う機会があり、新調したのが現在使っている名刺である。台紙の色は阿波特産の「藍」をモチーフに濃い藍色とし、文字は白抜き、背面には、一九二二年（大正一一）に行われた徳島市城山貝塚発掘調査時の鳥居の写真

を配した。自画自賛となるが、割合に好評である。「へえっ！鳥居龍蔵ですか。やっぱり昔の考古学者って「格好いい」ですね」という感想が聞かれる。写真の鳥居は、地元の協力者である森敬介、前田正一の両名を左右に従え、山高帽に漆黒の洋装で腕組みをしており、確かに格好いいのだ。そこで試みに、調査地を訪問する鳥居の写真を館蔵資料の中から捜してみると、国内では、鹿児島県竹屋神社での調査、長野県旧御射山遺跡の調査、愛媛県大洲巨石調査など、海外では、朝鮮半島での調査や、遠くアンデス

の石碑調査のものなど多くの写真が見つかった。現在は、調査現場を訪ねる際には作業服であることが多いが、当時は、学会報告や講演会と同様の認識であったのか、そこには盛装した、「お洒落」で格好のいい鳥居がたざずんでいた。

一方、同じ頃、館蔵資料の整理作業の途上で、右の鳥居のイメージとは「真逆」の印象を発散する資料と出会った。A4サイズの野紙を糸で仮止めした手製のノートで、表紙には『抜記帳』と記されている。ページをめくると、青色インクでびっしりと書き込まれた、平均三、四mmサイズ、一ページあたり千数百を数える手書き文字の塊が目飛び込んでくる。遼、金、元など中国東北部に所在した王朝に関する史料の抜粋であり、これが延々と数十ページ続くのである。鳥居は、新たな地域でフィールドワークを行う際、関連する文献を博捜することで知られるが、その実態をストレートに示す資料といえる。コピーやスキャナーのない時代の文献蒐集は、ある意味「重労働」だ。膨大な書物を読みあさり、必要と思われる部分をひたすら筆写していく。たとえ肩が凝り、歯が浮き、目まいがしようともである。鳥居が晩年に記した自伝

『ある老学徒の手記』に次の言葉がある。曰く、「私は学校卒業証書や肩書きで生活しない。私は私自身を作り出したので、私一人は私のみである。私は私自身を作り出さんと日夜苦心したのである」と。『抜記帳』は、碩学のストイックで没入的な「苦心」の有り様を無言で、かつリアルに伝える。

このようなことがあって、『抜記帳』に垣間見る鳥居の学問的苦悶の姿を、視察時の写真に記録された「お洒落」な鳥居の姿とは異なるもう一つの、そしてより実態に近い側面として紹介したこともあった。それはそれで決して間違ではないのだが、近年では私のなかで、「お洒落」な鳥居と、「苦心」する鳥居の捉え方について、少し違うニュアンスも芽生えつつある。そのきっかけとなったのが、國學院大學で鳥居からの薫陶を受けた考古学者、樋口清之の「代わりのない学者」に収められた次の述懐である。

大和旅行の時、先生と一緒に泊まった。大きいプールのような湯があつて、先生のとから入っていくと、どうしたはずみか、先生は山高帽をかぶつて湯舟につかつておられた。なんと珍妙な恰好だが、こんなとき何といったらよいかわからない。私のためらつていたので、先生はお気づきになつたのだろう。(中略)これは何か考えておられると身辺をあまり注意なさらない先生の癖だった。こんなことはたくらんでできることではない。全く天衣無縫。一途に物を考えられるとき、自然こんな状態におなりになるらしい。

思索に没頭するあまり、山高帽をかぶつたまま入浴する姿は、日常では想像しがたい光景だが、「いや、鳥居ならばさもありな

ん」と何故だか自然と腑に落ちたのである。大和の視察旅行にあつては、Yシャツ、背広に蝶ネクタイを着け、山高帽をかぶつた「博士スタイル」で出かけたのであろう。そして、現地調査で多くの遺跡情報に接し、独自の「知の世界」に入り込む。調査の過程で生じた学問的な懊悩が、そのまま宿舎へ、そして湯舟に持ち込まれたのではないだろうか。鳥居の「苦心」、すなわち学問的苦悶と、写真にみる「お洒落」で格好いい姿とは、あながち相反する別の側面ではないのかもしれない。視察にはいかにも紳士然とした装いで臨み、調査、研究にあつては文字通り「形振りかまわず」思索に没入していく。それが、鳥居本人のなかでは何の矛盾もなく渾然一体となつている。根っからの探求者の姿であり、それが自伝にいう、日夜「苦心」して作つた「私自身」の研究スタイルであつたのだろう。

さて、今年には鳥居龍蔵の生誕一五〇周年にあたる。現在、記念論集として、国内外の研究者の協力を得ながら、その業績を集成した『鳥居龍蔵の学問と世界』を編集集中である。鳥居龍蔵記念博物館に残された約七万点を数える膨大な、かつ大半が未公開の資料群を主な素材として各論考は綴られる。あるものは中国東北部での調査、また別に、西南中国、台湾など東アジア南方での業績、一方で、アンデス考古学からの見解や、ヨーロッパ人類学からの視点など、その内容は極めて多様であるが、これらに共通するコンセプトは「鳥居龍蔵の再発見」である。多角的な研究の成果が、鳥居の人と学問の再評価につながれば幸いである。

(徳島県立鳥居龍蔵記念博物館学芸担当主席)

より広い関心に応える研究環境の実現

永崎 研宣
(人文情報学研究所 主席研究員)

筆者は、仏教学におけるデジタル研究環境についての研究に従事している。研究環境が研究者の関心領域や研究方法を限定してしまうことになるのは極力避けるべきであると考えており、自ずと、より幅広い文脈から対象を捉えられる研究環境を志向することになる。そのような関心から、この四半世紀ほどの間、人文科学分野全般のみならず、人間文化が展開する環境一般にも関心を持ってデジタル研究方法やそのベースとなるデジタル研究資料の在り方を探求しつつ実践にもつとめてきている。本稿では、そのような視点から、一〇年前を振り返りつつ、一〇年後である二〇三〇年の人文科学に想いをはせてみたい。

一〇年前でも現在でも、資料を調査し、先行研究を参照して、新たな発見を研究成果として学会で発表し、論文を執筆し、著書を刊行する、という基本的な作法にはほとんど変わりはないように思われる。

一方で、デジタル研究環境に着目してみた場合、個々の研究者の関心の度合いに大きく左右されるものの、それは着実に人文科学のなかにも浸透しつつある。とりわけ、Web上の論文やデジタル画像化された資料を利用するという作法が一つの基本になっ

てきていることは多くの人が首肯するところだろう。二〇〇九年頃に始まる国立国会図書館による大規模デジタル撮影・公開事業の流れは各地の文化関連機関にも広がり、今や、それらを横断検索する「ジャパンサーチ」が作られるに至っている。

この流れの背景に着目してみると、まず、利用条件の緩和が一つの要素になっている。公開画像を一定の条件下で自由に再利用・再配布できるとする利用条件が、国内では二〇一四年の東寺百合文書MSを嚆矢として広がり、同年には国立国会図書館がインターネット公開資料の転載手続きを不要とし、二〇一五年には東京大学総合図書館所蔵の万暦版大蔵経DB、二〇一六年には国文学研究資料館の日本古典籍データセットが同種の条件により公開された。この流れにより、誰もが自由に各地の画像を利用した研究用サイトを構築することが手続的に可能になってきている。

技術面では、MS画像を国際的に相互利用するための規格、IIF(トリプル・アイ・エフ)が欧米の有力研究図書館を中心として二〇一一年頃に始まり世界的に広く普及した。国内では大正新脩大蔵経画像編をデジタル化したSAT大正蔵画像DBでの採用を皮切りに急速に普及し、人文学オープンデータ共同利用センタ

ーがこの規格を応用し、国内外を問わず各地の Web デジタル画像を渉猟し研究に活用できる共同研究プラットフォームを開発・公開するに至っている。利用条件の緩和と相まって、デジタル画像が研究活用される環境はこの一〇年で大きく進歩しており、そのことがデジタル画像の撮影・公開をさらに後押しするという循環に入っている。

一方、学術論文については、JStage や二〇一七年に終了した国立情報学研究所の電子図書館事業（コンテンツは JStage に移管）、各大学の機関リポジトリ等によって着々とオープンアクセス化が進んでおり、これも以前からの積み重ねが実を結びつつあると言えるだろう。

次の一〇年もまた、これまでに準備されてきた萌芽的なものがいくつかのきっかけを経て大きく花開いていくだろう。とりわけ期待されるのは、日本語のテキストデータベースである。すでに様々なものが存在するが、未だ電子テキスト化されていない資料も非常に多く存在する。この数年の取り組みから最近一気に脚光を浴びるようになった Keyword（くずし字 OCR）や「みんなで翻刻」（クラウドソーシング翻刻）といった取り組みが、状況を大きく変える可能性を期待させるところまで来ている。そして、入力されたテキストを使いやすくするための国際的な規格としての TEI ガイドラインは、日本での日本語化と国際コミュニケーションでのより徹底した国際化、という両方からの歩み寄りが始まったところである。その一方、公開された画像同士の関係をより効率的に記述・処理する手法としての Linked Open Data に関しては、これまでの

各地の取り組みを踏まえつつ、国立歴史民俗博物館の「総合資料学の創成」プロジェクトの成果が徐々に形を成しつつある。

まだ様々な課題はあるものの、受容し利用する側の態度や周辺状況の変化も織り込みつつ、二〇三〇年頃にはこの二つは研究基盤において重要な役割を果たすものになっているだろう。テキストデータベースは横断的な内容の検索が容易であり、そこから資料画像に至り、資料同士の関係をたどって様々な関連資料を Web で閲覧していけるという環境は、単にこれまでの研究をより効率的にしてくれるだけでなく、蝨壺と批判されがちな人文科学各分野の枠を相互に広げていく効果を個々の研究者の体験として少しずつでも積み上げていき、やがて、気がついたら新しい枠組みに至っていた、という状況になっていることを筆者としては期待している。

また、先の一〇年の上述の動向においては、東日本大震災という外的要因が資料の散逸への危機意識をもたらし、その歩を進める後押しをしたという面もある。今後一〇年を考える上では、現在のところ新型コロナウイルス感染症が外的要因として作用する局面も少なくないだろう。現時点では、図書館等に資料を見にいけないという状況を改善する上でデジタル化が改めてクローズアップされたところだが、今後、それがどのような振れ幅をもたらすのか、さらに新たな外的要因が登場するのか、ということも大きな鍵になる。いずれにしても、二〇三〇年における人文科学は、その時の社会のありようと人文科学研究者の探究心との落としどころを、デジタル研究環境にくっきりと映し出していることだろう。

二条城行幸図屏風

実方葉子

(泉屋博古館学芸課長)

京都鹿ヶ谷、丸太町通の東のどんつきに向かい合って建つふたつの研究機関がある。ひとつは住友史料館で、住友関係の歴史資料を継承し研究する施設である。そしていまひとつは住友家伝来の

美術品を保存研究し広く公開する美術館・泉屋博古館である。この鹿ヶ谷は住友家十五代住友吉左衛門(春翠)が大正時代に別邸を築いた地で、戦後その旧地の一角に住友家四百年の歴史を語り継ぐゆかりの二館が設けられ今日に至る。

泉屋博古館は昭和三十五年、十五代当主が主に集めた中国古代青銅器を保存研究する財団として設立された。以後、中国や日本の書画、仏教美術、茶道具、能用具、刀剣刀装具、洋画、近代工芸などが順次住友家から寄贈され、今日、館藏品は国宝二件、重要文化財十三件を含む三五二七件にのぼる。

江戸時代前期より大阪を拠点に銅山開発・銅製錬・輸出入業を営んできた住友家だが、明治維新の混乱期に事業が逼迫したため、今日伝わる美術品の多くはそれ以降、主として春翠の時代に集めら

れたものである。当館は東山を借景とする緑豊かなこの地で、季節ごとにさまざまな展覧会を開催し、住友コレクションの魅力を発信し続けている。

開館六十周年を迎える本年は、秋に記念の名品展「泉屋博古#住友コレクションの原点」を予定している。本稿でご紹介するのはその展示予定品の一点、珍しく江戸中期から住友家に伝来してきた《二条城行幸図屏風》である。

二条城行幸とは、江戸初期の寛永三年(一六二六)、後水尾天皇が將軍徳川家光に招かれ、二条城に五日間滞在した出来事である。幕府と朝廷の親密な関係を知らしめる記念的行事であり、その響応は幕府の威信をかけた豪華さであった。天皇が武家に赴くことは歴史上でも数少なく、この度の行幸は後陽成帝の聚楽第行幸以来、四十年ぶりのことであった。とりわけ市中の人々に強烈な印象を与えたのは、初日に天皇が二条城へむかう光景であった。

行幸当日は、まず朝に將軍が天皇奉迎のため、二条城から大名

を引き連れ参内。そのちに天皇の行幸となった。これらの列には関白をはじめとする公家衆のほか、幕府方の諸大名も江戸警固以外はすべて参列していた。そのルートは禁裏から中立売通・堀川通をへて二条城東門にいたるといふもの。しかしその大行列は、先頭が二条城に着いても最後尾はまだ内裏を出発しておらず、行列は朝から日暮れまで続いたという。

屏風では、整然と上下二段に区画され、上段には右方の二条城にむけ堀川通を進む天皇や中宮らの朝廷方、下段に参内のため中立売通を左に進む将軍ら幕府方を配する。その描写は詳細かつ的確で、例えば将軍や徳川家出身の中宮和子の牛車は、二頭立てで葵紋がほどこされ、また天皇の鳳輦は隼人兵士や楽人らに先導され厳かに進む。付き従う公家や武家は数こそ省略されているものの、配列や構成から個々の出で立ちまで、かなりの精度で記録類と一致する。そういった記録性の高さは同画題の作例中でも群を抜くが、加えて、上段に朝廷方／下段に幕府方、また左隻に内裏と天皇／右隻に二条城と将軍（と徳川和子）というように、大画面のなかで明快に両者を対比させる構想も秀逸であろう。

一方、威儀を正した行列とは対照的に、沿道ではおびただしい観衆が浮かれ騒ぐ。下段の中立売通では二階建の町屋が軒を連ね、上段の堀川通では堀川に仮設の棧敷が設けられ、幕や屏風を飾った立派な席も見られる。記録によると、行幸見物のために遠国から人が集まり、前夜から棧敷で酒宴が開かれたといい、この屏風でも貴賤をとりまぜ、思い思いに楽しむ様子だ。

また、豪華な着物、行楽用の弁当に酒、茶、そして瀟洒な町屋

の造作などが執拗なまでに描きこまれ、当時の衣食住の文化を余すことなく伝えている。ことに、江戸初期の装いの主役ともいわれる小袖は、大胆な意匠や舶来素材の使用など、デザイン幅が飛躍的に広がったこの頃の流行をよく捉えている。

人数の上でも、表現の多彩さにおいても、画家の力点はこの沿道に置かれているようだ。すなわち、朝廷方と幕府方に加え、観衆がもうひとつの極となっている。行幸は徳川家の治世の揺るぎないことを世に知らしめるデモンストレーションでもあったから、観衆がいなければ意味がない。また民が豊かであればあるほど、為政者＝徳川家の治世安楽を示すともいえよう。この絵の注文主はそういったことをよく理解した人物であつたに違いない。

しかし残念ながらこの屏風の注文主、作者とも全くわかっていない。ひとまず、依頼者は行幸の榮譽を語り継ぐべき幕府方の有力者と想定してみた。また作者は、当時の主流、狩野派や土佐派の画風とは異なるものの、生彩に富む的確な描写からやはり一流絵師であつたことは想像に難くない。そしてこの熱気あふれ実感こもる表現は、行幸からさほどへだたらない時期に制作されたことを物語る。

この行幸の後、幕府と朝廷の蜜月は長続きせず、わずか三年後に後水尾天皇は讓位を強行することとなる。歴史上の貴重な瞬間を捉えたこの屏風は、美術資料のみならず、歴史・文化資料として多くのことを伝えてくれるだろう。特筆すべき保存状態の良さで、昨日描いたかのような輝きをたたえるこの屏風、今後各方面からの研究が進むことを期待する。



泉屋博古館

【所在地】

〒606-8431 京都市左京区鹿ヶ谷下宮ノ前町24
TEL:075-771-6411 FAX:075-771-6099
ホームページ:<https://www.sen-oku.or.jp/kyoto/>

【交通アクセス】

■京都市バス「東天王町」下車、東へ200m角
「宮ノ前町」下車すぐ

【開館時間】

10:00～17:00（入館は16:30まで）

【休館日】

月曜日（11月23日は開館）、11月24日

【展覧会予定】

開館60周年記念名品展Ⅱ「泉屋博古 #住友コレクションの原点」
会期:2020年10月30日(金)～12月6日(日)
前期:10月30日(金)～11月15日(日)
後期:11月17日(火)～12月6日(日)
※「二条城行幸図屏風」の展示は後期のみ

【入館料】

一般 800円
高大生 600円
中学生以下無料
※本展覧会の入場料で青銅器館もご覧いただけます



▼生まれも育ちも関西ですが、二〇二五年の大阪・関西万博の決定をうけて思いだしたのが、子どもの頃に大阪万博の目玉「月の石」を家族で見に行ったことでした。長い待ち時間のすえ、やっと見ることができ、宇宙を感じられる物体が目前にあることに、衝撃を受けました。大阪万博閉幕後であるため、大阪万博跡地「万博記念公園」でのスポーツ展示だと思いますが、「月の石」のインパクトは大人になった今でも残っています。新刊の『万博学』（表紙裏・2頁）は「特集 一九七〇年大阪万博」を設け、一九七〇年大阪万博についての論考を取っています。二〇二五年の大阪・関西万博の開催を願ひ、本書が提唱する「万博学」に触れていただけでも幸いです。（一）

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

*コロナウイルス感染拡大防止のため中止の可能性有。

歴史学研究会（一橋大学）

12 / 5（土）・6（日）

美術史学会（慶應義塾大学）

12 / 12（土）・13（日）

▼初めてのマスク着用での座談会でした。のちに思い出になるのか？新しい日常になるのか？コロナ時代の万博のあり方にも注目したいと思います。（M）
 ▼最近、マスクが身体の一部化してきて、付ける必要のないのに付けていたり、これはこれで何か病いのような。（大）
 ▼梅雨明け宣言から一転、途端に夏に季節の境目がはっきりわかると、なんとなく気分も改まります。（m）
 ▼古本屋の隣に住むこと七年、部屋が古本で圧迫されて引っ越したいけど店が遠くなるから引っ越せない。（R）
 ▼イモリを三匹飼いはじめました。個体ごとに性格が異なり、ずっと見ていても飽きない愛らしさです。（n）
 ▼令和二年は年明けからいろいろなありすぎて、数年分生きたような錯覚が。花を愛でる心の余裕は欲しい処。（き）

▼表紙図版：一九三九年サンフランシスコ万博の会場鳥瞰地図／増山一成氏提供／『万博学』より

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.111

2020（令和2）年9月10日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/

表紙デザイン

HON DESIGN

山下久夫（金沢学院大学名誉教授）
斎藤英喜（佛教大学教授）編

日本書紀三三〇〇年史を問う

6月刊行

A5判上製・四七二頁／本体八、五〇〇円



古代から近現代に至るまで、日本書紀を読むという行為は、その時代固有のあらたな「歴史」や「神話」を創造していく、能動的な知の運動であった。日本書紀編纂より1300年を迎えたいま、国文学、歴史学、神話学、思想史研究などの多領域から、日本書紀の受容史を問い直す。

菱田哲郎（京都府立大学教授）
吉川真司（京都大学教授）編

古代寺院史の研究「オンデマンド版」

6月刊行

B5判並製・五四頁／本体二、三〇〇〇円



古代の寺院遺跡について、实地に検討を行い、分野の垣根をとりはらって議論を重ねてきた「古代寺院史研究会」。本書は主に、畿内・周辺地域の古代寺院に関する論考と最新の調査知見、さらに古代朝鮮・中国の寺院研究を収録し、分野横断的な視点で古代寺院史研究の新天地を拓く。（初版2019年）

佐野真人（皇學館大学准教授）著

古代天皇祭祀・儀礼の史的研究

A5判上製・四六頁／本体二、〇〇〇円



桓武天皇朝以降に見られるとされる天智天皇系皇統意識（新王朝意識）の見直しを出発点に、平安時代初期の桓武天皇朝・嵯峨天皇朝における儀礼の導入や整備、文徳天皇朝以降の儀礼の変遷や新たな儀礼の創出について考察を加えることで、平安時代前期を中心とした古代日本の儀礼秩序の構築過程の一端を明らかにする。

片平博文（立命館大学名誉教授）著

貴族日記が描く京の災害

みやこ

4月刊行

A5判上製・四六頁／本体五、〇〇〇円



平安・鎌倉期の貴族の日記から平安京の季節災害とその要因（火事、洪水、旱魃、台風）を抽出し、文字情報を歴史地理学の手法で空間情報に置き換えて視覚化することで、日記をただ読むだけでは見えてこない平安京の姿を浮かび上がらせる。

米家泰作（京都大学准教授）著

森と火の環境史

—近世・近代日本の焼畑と植生—

A5判上製・三八四頁／本体七、五〇〇円

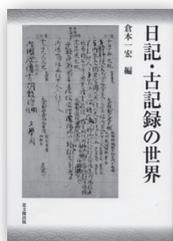


火を用いた人と環境との関わりとして焼畑をとらえ、焼畑の近世的展開と「進化」、土地制度史と焼畑、火と植生のポリティクス（政治）を問う。「人為の火」という観点から、日本の焼畑の歴史地理と環境史を再考する試み。

倉本一宏（国際日本文化研究センター教授）編

日記・古記録の世界

A5判上製・七九二頁／本体二二、五〇〇円



日本の日記・古記録を題材として、日本文学、日本文学など関連分野の第一線の研究者がそれぞれの視点からその本質に迫った論文集。日記とは何か、古記録とは何か、それらを記録することの意味、記主や伝来をめぐる諸問題、さらには古代・中世における使われ方など、単に日記・古記録を利用するだけにとどまらない意欲作35論考を収録。

京都文化博物館企画・編集

京都 祇園祭

―町衆の情熱・山鉾の風流―

3月刊行

B5判並製・二五〇頁／本体二、五〇〇円

橋本政宣・宇野日出生編

賀茂信仰の歴史と文化

〔神社史料研究会叢書Ⅵ〕

5月刊行

A5判上製・二五八頁／本体七、八〇〇円

八反裕太郎著

描かれた祇園祭―山鉾巡行・ねりもの研究―

祇園祭を描いた絵画作品から、祭儀の変遷を読み解く試み

本体 一五、〇〇〇円

河内将芳著

中世京都の都市と宗教〔オンデマンド版〕

都市社会と宗教・信仰との関係についてその実態を問い直す

本体 六、八〇〇円



2020年春に京都文化博物館で開催予定であった同名展公式カタログ兼書籍。災厄が降りかかるたびに、最高水準の芸術でもって復興を遂げてきた祇園祭の山鉾。その希少な懸装品や装飾品等から、祇園祭の歴史、現代に至るまでの様々な復興の様子を通覧する。



【内容】賀茂社祭神とその歴史の変遷（嵯峨井建）／建築と祭儀から見た賀茂社本殿の意義（黒田龍二）／賀茂御祖神社社殿の変遷（京條寛樹）／鴨社古図（賀茂御祖神社絵図）と賀茂社御参籠（樋笠逸人）／上賀茂社の忌子（森本ちづる）／上賀茂神社競馬会神事の儀式次第の変遷（山本宗尚）／賀茂下上社の雨乞いと朝廷の祈雨再興（間瀬久美子）／「御棚会神事と賀茂六郷」補遺（宇野日出生）

嵯峨井建著

神仏習合の歴史と儀礼空間〔オンデマンド版〕

儀礼空間を視点に論じ、神仏習合の実態を明らかにする

本体 八、六〇〇円

宇野日出生著

八瀬童子―歴史と文化―〔オンデマンド版〕

関係文書や八瀬の地に残る習俗から、その歴史と文化を紹介

本体 四、五〇〇円

岩永てるみ（愛知県立芸術大学准教授）

阪野智啓（同右准教授）

高岸輝（東京大学准教授）

小島道裕（国立歴史民俗博物館教授） 編

「月次祭礼図屏風」の復元と研究

—よみがえる室町京都のかがりき—

6月刊行

A4判上製・二五〇頁／本体 一六、〇〇〇円

応仁の乱以前の京都を描いた唯一の屏風、ここに復元

東京国立博物館所蔵「月次祭礼図屏風模本」は、江戸時代に「月次祭礼図屏風」を写したもので、その失われた原本は、室町時代中期のものであったと考えられている。

応仁の乱以前の京都の風俗を描いた屏風は他になく、この模本は貴重な絵画資料となっているが、彩色は不完全であり、欠損もあるため、元の絵画がどのようであったかは不明な点が多かった。

愛知県立芸術大学を中心に、日本画、美術史、文献史学など多方面の専門家の協働により学際的に原資料の復元が試みられ、その過程でさまざまな新知見が得られた。ペールに包まれた室町時代の京都に光をあてる画期的プロジェクトの成果を公開。

三浦圭一著

中世民衆生活史の研究〔オンデマンド版〕

主に畿内地域の民衆生活に関する諸論稿を収録

本体 九、〇〇〇円

下坂守著

中世寺院社会と民衆―衆徒と馬借・神人・河原者―

比叡山延暦寺の活動実態と京・近江の民衆との関係を考察

本体 七、五〇〇円

序文

【図版編】

「月次祭礼図屏風模本」

復元「月次祭礼図屏風」

做古／様式／景観／技法／材料／工程

【論考編】

「月次祭礼図屏風模本の図像復元について」

「月次祭礼図屏風模本復元技法の色と表現」

室町やまと絵のなかの「月次祭礼図屏風」

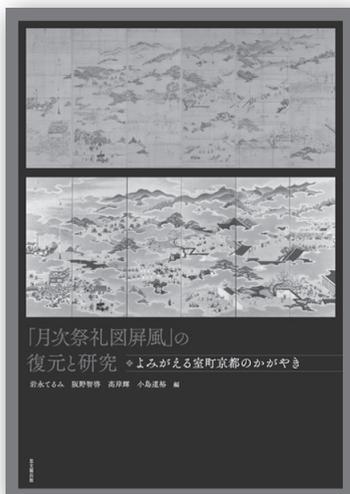
東京国立博物館所蔵模本類と

「月次祭礼図屏風模本」について

「月次祭礼図屏風」に描かれた幕府と神社

「月次祭礼図屏風」に描かれた室町期の祇園会（河内将芳）

（岩永てるみ）



河内祥輔（北海道大学名誉教授）

小口雅史（法政大学教授）

E ヴィッター（テュービンゲン大学教授）

M メルジオヴスキ（シュトゥットガルト大学教授）

編

儀礼・象徴・意思決定

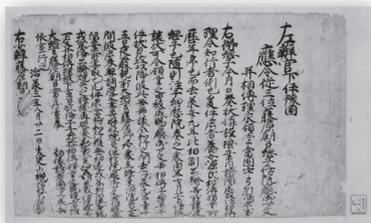
―日欧の古代・中世書字文化―

10月刊行予定

A5判上製・二五〇頁／本体八、〇〇〇円

日本と欧州、ユーラシアの東西に遺された古文書の比較研究から、発給者の意思形成にかかわる儀礼や象徴の在り方はどのように読み解けるのか。

それぞれの国の研究者が集い、古代・中世における皇帝・国王文書から社会構造の変容をあつづけることを試みた国際シンポジウムの成果論集。彼我の古文書学の様々な限定性や観点を知ることで、支配や行政の手段といった基本的問題への新たな議論を提起する。巻頭16頁におよぶカラー口絵には、日本・ドイツ・フランスに伝存する貴重な古文書を掲載した。



治承三年八月二十二日官宣旨〈小箱9〉
（京都府立京都市・歴史館 東寺百合文書ウェブより）

【内容目次】

はじめに（小口雅史）

第一部 文書の機能と場

日本古代の文書と口頭伝達

―― 政務処理と通知（下命）の両面における――（坂上康俊）

カロリング期における発給者と受領者「マーク・メルジオヴスキ」翻訳 津田拓郎

中世の天皇文書と儀礼（高橋一樹）

ペトルス・デ・ヴィネアの名を冠した手本集成

―― 13世紀の文書雛形集と中世後期の国家理念にとつての意義――

（カール・ホルヒャルト／翻訳 井上周平）

第二部 文書テキストへのまなざし

オットー朝期の君主文書における発給者と受領者の関係

（ゾルフファンク・フュナー／翻訳 津田拓郎）

日本古代における私信の系譜とその展開（小口雅史）

天皇の署名文書と花押について（河内祥輔）

オットー朝・ザーリアー朝の君主文書における図像的象徴

（イルムガルト・フネース／翻訳 津田拓郎）

第三部 国際シンポジウム「儀礼・象徴・意思決定」に寄せて

二つの「中世」における「ウルクンデ／シャルト」vs「文書」

―― その概念的対置およびシンボル形式的比較によつて――

（マルクス・リュッターマン）

古代・中世文書資料の日欧比較（岡崎敬）

「コメント」 古文書学の視覚化（佐藤雄基）

「コメント」 文書の文化史への提言（アンヤ・タラー／翻訳 津田拓郎）

「コメント」 「儀礼・象徴・意思決定」の比較史に向けて（加納修）

結びにかえて（小口雅史）

京都府立京都学・歴史館編

東寺百合文書(十四)又函二

9月刊行予定

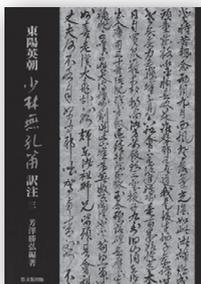
A5判上製函入・四四八頁／本体 一三、五〇〇円

芳澤勝弘(花園大学国際禅学研究所顧問) 編著

東寺に襲蔵されてきた、奈良時代から江戸時代初期までの総数18,000点・27,000通におよぶ日本最大の古文書群である東寺百合文書。「ひらかな之部」刊行中の『大日本古文書』未収録の「カタカナ之部」を翻刻

妙心寺派四派の一つ、聖澤派の開祖・東陽英朝禅師(1428-1504)の語録『少林無孔笛』六巻を現代語訳し、詳細な注を付す。

東陽英朝 少林無孔笛訳注(三)



9月刊行

A5判上製函入・七七八頁／本体 一五、〇〇〇円

代に甦らせる。全三冊

■全巻構成■

- 一(巻之一・巻之二) 入寺法語
- 二(巻之三・巻之四) 仏事
- 三(巻之五 偈頌、巻之六 像贊・道言)

京都大学文学部日本史研究室編

兵範記(四)

範圍記・知信記(全二冊)



京都大学史料叢書『兵範記』シリーズ待望の最終巻。兵部卿平信範の日記『兵範記』(京都大学附属図書館蔵)の浄書本二五巻のうち、仁安三年正月〜承安元年二月までの五巻の影印を収録。本冊には同総合博物館所蔵の「兵範記 断簡」、信範の曾祖父・範圍の「範圍記」、父・平知信の「知信記」(ともに附属図書館所蔵)それぞれの影印と翻刻を収録。さらに解題を付す。

5月刊行

A5判上製函入・影印篇五一六頁・翻刻篇三二〇頁／本体 三〇、〇〇〇円

中島楽章（九州大学准教授）著

大航海時代の

海域アジアと琉球

—レキオスを求めて—

これまで十分に活用されてこなかったヨーロッパの文献、地図などを縦横に用いることで、海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、さらに漢籍等の公式的な史料からではとらえきれない古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明する。

8月刊行

A5判上製・六〇〇頁／本体九、五〇〇円



序章 古琉球海外交流史とヨーロッパ史料

【第一部 世界図と東アジア】

第1章 世界図の発達と東アジア——ポルトレマイオス図からカヴェリ図まで

第2章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(一)——ポルトガルの海域アジア進出と世界図

第3章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(二)——最初のポルトガル系東アジア図

第4章 ジバングとパリオコ——大航海時代初期の世界図と日本

【第二部 ゴーレスとレキオス】

第5章 ゴーレス再考(一)——アル・グールとゴーレス

第6章 ゴーレス再考(二)——その語源問題をめぐって

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

大航海時代の日本と金属交易

〔別府大学文化財研究所企画シリーズ③〕

本体三、五〇〇円

菊池誠一編

朱印船貿易絵図の研究

精彩なカラー図版に、多彩な研究者による論考6篇を収録

本体七、八〇〇円

第7章 マツカカの琉球人(一)——『歴代宝案』にみる

第8章 マツカカの琉球人(二)——ポルトガル史料にみる

【第三部 レキオスを求めて】

第9章 レキオスは何処に——ポルトガル人の琉球探索と情報収集

第10章 マゼンタとレキオス——スペインのアジア進出と琉球認識

第11章 レキオス到達(一)——一五四二年、ポルトガル人の琉球漂着

第12章 レキオス到達(二)——琉球情報の伝播と変容

終章 大航海時代の琉球王国

田中健夫著

対外関係と文化交流(オンデマンド版)

中近世日本の東アジアを中心とした対外関係と文化交流の論考

本体一、三、八〇〇円

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究

第二尚氏・明治前期の景観を描いた大型図版絵画史料集成

本体一、八、五〇〇円

小山聡子（二松学舎大学教授）編

前近代日本の病氣治療と呪術

4月刊行

A5判上製・三〇六頁／本体八、〇〇〇円

小山聡子（同右）

松本健太郎（同右准教授）編

幽霊の歴史文化学

四六判上製・三四四頁／本体二、五〇〇円

京都橋大学女性歴史文化研究所編

医療の社会史——生老・病・死——

医療の社会的展開が窺える通史的企画（論文9本・コラム4本収録）

本体二、八〇〇円

石田純郎編著

緒方洪庵の蘭学

集団履歴調査法の研究を通して日本医学の質を明らかにする

本体四、八〇〇円



前近代では、病氣の原因は神やモノノケ等、霊的なものに求められ、その治療は宗教者の呪術に任されていた。僧侶や陰陽師らが行った呪術による病氣治療の実態とその全体像を、古代から近世まで多角的に論じること、それぞれの時代に生きた人々の精神世界に迫る。



人びとは幽霊をどう感知し、それを表象するためにいかなる工夫をしてきたのか、幽霊になにを求めたのか。歴史学、メディア学、文学、美術史学、宗教学、社会学、民俗学等さまざまな研究分野から日本人の精神世界の一端に迫る。【好評重版】

青木歳幸著

在村蘭学の研究

信濃地方の在村蘭学の地域社会への関わりを明らかにする

本体八、六〇〇円

山田雄司著

怨霊・怪異・伊勢神宮

社会の底流で歴史を動かしてきた怨霊・怪異の諸相を明かす

本体七、〇〇〇円

ジラルデッリ青木美由紀（美術史家）編著

オスマン帝国と日本趣味 ジャポニスム

今秋刊行予定

A5判上製・三〇〇頁／本体六、五〇〇円

日本趣味の美術工芸品の品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブルの地に、どのような経緯で、いかにしてもたらされたのか？日本製あるいは外国製による日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。



〔目次〕

- 総論（ジラルデッリ青木美由紀）
 - ドルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」（渡辺芳郎）
 - 日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵の有田磁器の特色（大橋康二）
 - 〔コラム1〕万博を通じた日本工芸品の広がり——有田焼の場合（藤原友子）
 - 〔コラム2〕ドルマバフチェ宮殿が収蔵する寄木のライティングビュロー（金子皓彦）
 - ドルマバフチェ宮殿所蔵の日本製金工品（清水克朗）
 - 〔コラム3〕トルコのコーヒー文化（ヤマンラール水野美奈子）
 - 〔コラム4〕イスタンブルのジャポニスムとアール・ヌーヴォー（ジラルデッリ青木美由紀）
 - オスマン帝国の宮殿を彩った日本の刺繍（松原史）
 - 〔コラム5〕東から西から——イスタンブル貴頭人名録（ジラルデッリ青木美由紀）
 - 〔コラム6〕山田寅次郎——日本とトルコの友好の礎を築いた男（谷田有史）
 - 近代オスマン宮廷の美意識と日本（ジラルデッリ青木美由紀）
- 索引

寺本敬子著

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

日仏両国の史料を駆使し、ジャポニスムの誕生を解き明かす
〔好評3刷〕
本体六、五〇〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

ジャポニスムの全体像に迫る、ジャポニスム学会20周年記念出版
本体二、八〇〇円

天貝義教著

応用美術思想導入の歴史

——ウィーン博参同より意匠条例制定まで——
本体七、五〇〇円

デザイン史フォーラム編

国際デザイン史——日本の意匠と東西交流——

豊富な挿図を掲載、日本と西洋諸国との交流を探る56篇
本体二、九〇〇円

鄭銀珍 (大阪市立東洋陶磁美術館学芸員) 著

韓国陶磁器史の誕生と古陶磁ブーム

3月刊行

A5判上製・四六六頁／本体 一四〇〇〇円

王静 (大阪観光大学専任講師) 著

現代中国茶文化考(オンデマンド版)

6月刊行

A5判並製・三〇八頁／本体 六二〇〇円

竹内順一、岡佳子、ルイス・コート、アンドリュー・M・ワツキー編

「千種」物語—二つの海を渡った唐物茶壺—

日・米・中の研究者による、名物茶壺の最新の研究成果

本体 三、二〇〇円

依田徹著

近代の「美術」と茶の湯

—言葉と人とモノ—

近代美術史の視点から、明治以降の茶道具の評価を捉え直す

本体 六、四〇〇円



19世紀、古陶磁が美術品として再発見され、収集、鑑賞、そして研究が本格化した。その中で大きな役割を担ったのが浅川伯教・巧の兄弟である。本書は、浅川兄弟の活動を軸として、近代における韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブームの全容を鮮やかに浮かび上がらせる。



いまや現代中国のアイデンティティともいえる、茶文化。その茶文化を創造し、再構築した政治的・経済的文脈とはどのようなものであり、それはどのようなプロセスをへて、さらにはそこにかかわる力がはたらいているのか。中国の現代茶文化を映し鏡として、文化が本来もっている意味や力を見つめ直す。(初版2017年)

朴珉廷著

そそろうの哲学—数寄茶湯の原点—

藝道における修行論の研究を通して見出す「侷相」の哲学試論

本体 五、〇〇〇円

大益茶道院発行／吳遠之著

基礎茶式—中国茶道研修方法—

茶を通じて芸術を楽しみ心を培い、精神修養を目指す教本

本体 九〇〇円

校訂原本『古画備考』(全5巻)

来春刊行予定 A5判上製函入・総二九二二頁／価格未定

江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に復原。現代の視点から美術史成立前後における江戸の学知の達成を世に問い直す。江戸末期の絵画研究の実態をあざやかによみがえらせた、古画備考研究会による永年の成果がここに完結。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著『古画備考』巻1〜48(嘉永三〜一八五〇年起筆)を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻。項目索引を付す。

◎原本に含まれない巻49〜51は東京国立博物館蔵『古画備考』(図書寮印本)を底本に同様の校訂を行う。

◎太田謹増訂本(明治三六〜一九〇三年初版、大正元〜一九二二年校訂増補第二版、弘文館刊/昭和四五〜一九七〇年復刻、思文閣刊)と、その底本である東京国立博物館蔵本(図書寮印本)より校合を行いその校異を註に記載。

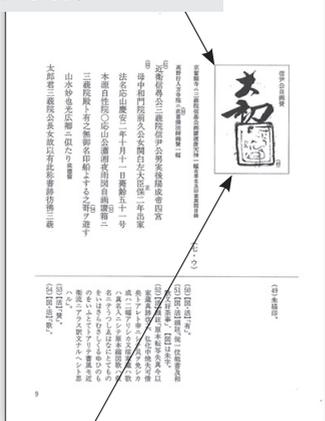
『古画備考研究会』

研究代表者：玉蟲敏子(武蔵野美術大学教授)
翻刻分担者：相澤正彦(成城大学教授)／五十嵐公一(大阪芸術大学教授)／井田太郎(近畿大学教授)／出光佐千子(青山学院大学准教授)／高橋真作(東京国立博物館研究員)／鶴岡明美(昭和女子大学准教授)／並木誠士(京都工芸繊維大学教授)／成澤勝嗣(早稲田大学教授)／野口剛(根津美術館学芸課長)／畑靖紀(九州国立博物館主任研究員)／本田光子(愛知県立芸術大学准教授)／宗像晋作(大分県立美術館学芸員)／山口真理子(城西国際大学・水田美術館学芸員)／吉田恵理(静嘉堂文庫美術館学芸員)

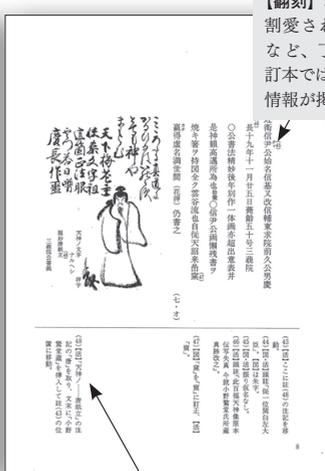
編集委員：北野良枝(元東京大学藝術学助教)／玉蟲敏子／鶴岡明美

【 組み見本：巻三 廷臣二 近衛信尹の項 】

増訂本では区別できなかった貼紙箇所を明示。



【翻刻】増訂本編集時に割愛されていた小字註など、丁寧に翻刻。増訂本では知りえなかった情報が掲載されている。



【画像】図、署名、印、画賛等の部分は、原本画像をそのまま掲載。原本に忠実なレイアウトを復原。

【脚註】図書寮印本、太田謹増訂本との校異を掲載。どのように校訂されたかが、簡潔にわかる。

「各巻のおもな内容」

- ◆第1巻◆ 【巻1 帝室】天皇・親王など 【巻2・3 廷臣】皇后・廷臣など 【巻4・6 武家】江戸期までの武家、徳川第十三代將軍まで、大名など 【巻7・10上 職門】江戸期までの僧 【巻10下 松花堂流】松花堂昭乘とその門人
- ◆第2巻◆ 【巻11 釈門】黄蘗道暉、禪僧、その他近世画僧 【巻12上 詩人】画をよくした詩人 【巻12下 和歌・連俳・茶香・雑】画をよくした歌人・茶人など 【巻13・20 名画】平安中期までの記録上の専門絵師、平安中期、鎌倉初期の絵仏師や宮廷画人、鎌倉、室町初期の画人・仏師、曾我我、阿弥派、雪舟とその門人など
- ◆第3巻◆ 【巻21・28 名画】室町後期・桃山期の水墨画逸伝画人 関東画人、雲谷派および雪舟末流、長谷川派、海北派、特定の画系に属さない画人、長崎画人、文人画家、天明・寛政年間の画人 【巻29・30 名画 近世】文化年間の画人、文政年間の画人、「広益書人名録序」「画業要略」「山中人饒舌」「寓意」「文川画譜等」の写本
- ◆第4巻◆ 【巻31 浮世絵師伝】(別筆) 浮世絵師 【巻32 巨勢家】大和絵の巨勢、宅間、住吉、芝、粟田口の各流派 【巻33 土佐家】土佐派 【巻34 住吉家】住吉派、板谷派 【巻35 光悦流】光悦流 【巻36・39 狩野譜】中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、諸系図 【巻40 狩野門人譜】狩野派の門人
- ◆第5巻◆ 【巻41・43 狩野門人譜】中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、駿河台狩野家、浜町狩野家の各門人とその系譜 【巻44 英流】英一蝶以下の本流とその門人 【巻45 禁裏造管部類】御所・大板城・江戸城、寺院等の障壁面の画題や作者を記した様々な史料、朝鮮に贈った屏風資料など 【巻46 二十四孝狩野家拾人寄合書】(二十四孝狩野家拾人寄合書)、印譜、略画譜、朝野の民間録など 【巻47 倭絵名目】(日本書紀)をはじめ物語、史書・歌集、壁障など文献資料に言及された絵画制作者、組織、障子・障子絵、障子・屏風の種類や画題、描法など 【巻48 巻物画像種類】作品分類別に障壁面、絵巻物、肖像画部、仏画、神道絵画、雑類など 【巻49 長崎画人伝】(別筆、図書寮印本) 渡辺秀実著「長崎画人伝」、荒木一著「続長崎画人伝」著者不明「米船語」の三書を取録 【巻50・51 高麗朝鮮画人伝】(別筆、図書寮印本) 高麗朝鮮画人伝

本研究および刊行にあたっては「江戸時代における(書画情報)の総合的研究・『古画備考』を中心に」(第一期二〇一三～〇五年度、第二期二〇一六～〇八年度科学研究費補助金基盤研究B)および出光文化福祉財団の助成を受けています。

「推薦のことば」

▼東洋美術史研究に必備の書

『古画備考』は最も永く用いられてきた画家人名辞典として、東洋美術史研究の基本文献であり、日本に伝存する作品を研究する際に、今でも最初には確認・参照すべきものである。今回の刊行では久しく公開が待ち望まれた自筆原本の全容、さらに各作品情報の刊行ごとの変更過程が明らかにされる。それは、近代日本における「美術史」成立過程の様々な問題を提起することになる。東洋美術史研究に必備の書！一九七〇年復刻本に替わる新たなパイプルの登場である。

板倉聖哲(東京大学 東アジア絵画史)

▼日本美術史研究への福音

待ちに待った刊行である。玉蟲敏子氏を中心に日本美術史研究の精鋭が集われ、朝岡興偵自筆原本『古画備考』校訂の研究会が長く続けられてきた。その地道で尊い活動の成果がこうして世に出される。日本美術史にとっての福音である。朝岡興偵の知識と洞察の総体『古画備考』は前近代の古書画研究の達成であり、その出版は近代における日本美術史研究の黎明でもあった。それを二〇二〇年の今、改めて丁寧に読み込みによる原本の全翻刻、校訂の姿で手に取ることが出来る。江戸の学知に触れ、思いを新たにさらなる研究が始まる。恩恵は計り知れないほど大きい。

佐野みどり(学習院大学 日本美術史)

▼美術史への架橋

近世を「画史画伝」、近代を「美術史」の時代とするなら、『古画備考』は両者を架橋した存在だ。画人伝、縮図、印章、落款等の膨大な情報。伝記は美術史の基盤となり、縮図等は失われた歴史を今に垣間見せる。

早くから史料としての重要性が認識されながら、原本・写本・増補本の関係が問題となっていた。それが玉蟲さんたち研究チームの長年の成果で、第一級の史料翻刻として実現した。当時最高の学術知と歴史風景を目撃できるだろう。

佐藤道信(東京藝術大学 近代日本美術史)

▼美術史学 史研究の基盤

『古画備考』は日本美術史の基礎文献である。この度、玉蟲敏子氏をはじめ第一線の研究者によって朝岡興偵の自筆稿本が校訂され、全翻刻されたことの意味は絶大である。本書は『古画備考』の原本の記載内容や落款・印象の画像、朝岡による縮図を取載し、幕末の古書画研究の実態をつかめると同時に、近代に『古画備考』が世界中に及ぼした影響をたどれる。

今後の日本絵画史研究、美術史学 史研究の基盤となる本書の上梓を喜びたい。

ユキオ・リビット(ハーバード大学 美術建築史)

藤木晶子（京都市立芸術大学非常勤講師）著

竹内栖鳳 水墨風景画にみる画境

来冬刊行予定

A5判上製・三五三頁／本体六、五〇〇円

本書では竹内栖鳳の後半生の絵画創作について、水墨風景画の制作に焦点を当てて論考する。近代日本美術において栖鳳晩年の水墨風景画の絵画史上の価値を明示するとともに、これまで画家の前半期に集中していた栖鳳の画業の評価を再考し、彼の後半期の絵画創作の意義を提唱する。

田中日佐夫・田中修二著

海を渡り世紀を超えた

竹内栖鳳とその弟子たち

栖鳳滞欧期の足跡を辿り、その後の作品との関連にふれる

本体三、〇四八円

中川馨著

動物・植物写真と日本近代絵画

近代日本の「写真」と「絵画」との関連性を論究、関連図版94点掲載

本体五、〇〇〇円

〔予定目次〕

- 第一章 栖鳳晩年の水墨風景画の全貌 潑墨・破墨の画法と栖鳳作品／大正末期頃―昭和七年頃／昭和八年頃―昭和九年頃／昭和一〇年頃―昭和一六年／水墨風景画制作の変遷
- 第二章 「淡交会展」における挑戦 淡交会の特徴と意義／第三回淡交会展／第七回淡交会展／淡交会における出品画家の動向
- 第三章 潮来風景の写生取材の実態 写生帖の素描分析／藤岡鑛二郎の著述／竹内栖鳳の著述／写生取材から絵画化への推移
- 第四章 中国と潮来の風景表現の連繫 中国訪問と同地の風景画／中国風景画に辿る表現の契機／潮来風景画における表現の変遷／水墨風景画に至る絵画創作の展開
- 第五章 「栖鳳紙」開発と作画意図 日本画の基底材に関する動向／栖鳳紙の開発着手から完成まで／栖鳳紙に対する試験分析／紙本と絹本を巡る栖鳳の思索
- 第六章 近代水墨画と栖鳳の画境 近代の水墨表現の推移／東京画壇の水墨画／京都画壇の水墨画／南画系の水墨画／洋画出身者の水墨画／栖鳳の水墨画の位置付け

富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

通天楼日記

―横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷―

黎明期日本の写真／洋画／印刷史の実態を明らかにする一級史料群

本体一六、四〇〇円

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

江戸時代後期の古画研究ネットワークの実態を浮かび上がらせる

本体九、二〇〇円

小野芳朗 (京都工芸繊維大学大学院教授)

本康宏史 (金沢星稜大学教授)

中嶋節子 (京都大学大学院教授)

三宅拓也 (京都工芸繊維大学助教)

編

図説 大名庭園の近代(仮)

11月刊行予定

B5判上製・二八〇頁／価格未定

近代の大名庭園では、学者により名園としての価値付けがなされ、旧藩主らが銅像や碑で顕彰される一方で、市民広場として開放され人々が集い、また文明開化の象徴たる博物館が置かれ、博覧会の会場となるなど、雑音ともいえるような多様な行為が入り乱れている。そして今もまた、迫りくる都市化の波に浸食されながらも雑音を取り除きつつ、近世の空間を期待してくる観光客のため

小野芳朗・本康宏史・三宅拓也著

大名庭園の近代

近代の歴史を掘り起こし、大名庭園の変容を明らかにする

本体 八、〇〇〇円

尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編著

庭と建築の煎茶文化―近代数寄空間をよみとく―

近代数寄空間を煎茶の要素から読み解き、新たな解釈を提示

本体 五、五〇〇円



栗林公園絵葉書 (個人蔵)



偕楽園絵葉書 (個人蔵)

に、近世らしい空間を演出し、ときにはそれを創造してきた。

現代の大名庭園からは失われてしまった近代における変化の痕跡を、画像資料(絵図、地図、古写真、絵葉書)を中心に紹介。従来注目されなかった独自の視点から収集したビジュアルを盛り込みつつ、現在の各庭園の空間に近代が与えた影響を明らかにする。

小泉和子編

茶の室内デザイン

茶が日本住宅の室内意匠に与えた影響を論じる

本体 三、五〇〇円

片平幸著

日本庭園像の形成

日本庭園の独自性・芸術性が確立される過程を追う

本体 四、〇〇〇円

〔収録庭園〕

- 岡山後楽園
- 金沢兼六園
- 水戸偕楽園
- 高松栗林公園
- 彦根玄宮楽々園
- 小石川偕楽園
- 広島縮景園
- 鹿児島仙巖園
- 沖縄識名園

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・
鳥居龍蔵を語る会編

鳥居龍蔵の学問と世界

11月刊行予定

A5判上製・五五〇頁／価格未定

〔予定内容目次〕

〔Ⅰ〕総論・鳥居龍蔵を語る

人類学者鳥居龍蔵の学問と人物像（天羽利夫）

〔Ⅱ〕世界の中の鳥居龍蔵

鳥居龍蔵と西洋の人類学界 —— 学問は国境を越えて ——（ラファエル・アバ
千島・樺太調査（仮）（齋藤亨子）

朝鮮半島調査（吉井秀夫）

鳥居龍蔵の台湾研究 —— 第1回・第2回の調査を中心に ——（宮岡真央子）

『人類学上より見たる西南支那』を読む

—— 中国近代史研究史料としての鳥居龍蔵の旅日記 ——（吉開将人）

遼宋〜蒙元代の軒平瓦における造瓦変革と

朝鮮半島・日本への影響（佐川正敏）

鳥居龍蔵の中国遼上京における考古学研究（董 新林）

鳥居龍蔵とアンデス文明との出会い（岡 雄二）

〔Ⅲ〕鳥居龍蔵、列島を歩く——国内調査の軌跡——

戦後日本考古学史における鳥居龍蔵の再評価（中村 豊）

鳥居龍蔵による近畿調査の成果とその意義（岡本治代）

鳥居龍蔵の弥生式土器観 —— 『諏訪史』第一巻編纂の頃 ——（高島芳弘）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館による、鳥居龍蔵生誕一
五〇周年・鳥居龍蔵記念博物館一〇周年記念論集。

東京帝国大学の坪井正五郎に学び、当時調査の及んでいなかった中国ほか、国内および台湾・朝鮮・ロシア等東アジアを中心に広い地域で野外調査を行った、考古学・人類学・民族学者鳥居龍蔵（二八七〇—一九五三）。その多様な活動と後世に与えた影響を、多くの未公開資料を用いて様々な視点から論じる。

鳥居龍蔵の徳島における調査活動とその意義について（石井伸夫）

徳島市城山貝塚の発掘調査とその意義（湯浅利彦）

城山第2号貝塚から出土した人骨 —— 発掘記録からの検証 ——（佐宗亜衣子）

鳥居龍蔵と武蔵野会

—— 武蔵野会の設立と東京府下の史跡保存活動 ——（氏家敏之）

〔Ⅳ〕検証・鳥居龍蔵——資料整理の最前線——

鳥居龍蔵の台湾調査に関する諸資料（石尾和仁）

鳥居龍蔵の「学説形成」における南方諸民族把握の試み（石井伸夫）

大正期の鳥居龍蔵と本山彦一 —— 本山彦一書簡の紹介を中心に ——（松永友和）

徳島城復元図の制作と城山貝塚（大橋俊雄）

鳥居龍蔵の未刊原稿群と学知のあり方 —— 中国からの帰国時作成目録に注目して ——（長谷川賢二）

〔Ⅴ〕資料の窓

新聞が報じた鳥居龍蔵の鹿児島県調査（大原賢二）

鳥居龍蔵の中国山東省調査（鳥居 喬）

『鳥居龍蔵年譜（抄）』について（下田順一）



参考図版「写真（南米調査風景）」
（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵）

岡本貴久子（国際日本文化研究センター共同研究員）著

記念植樹と日本近代

— 林学者本多静六の思想と事績 —

A5判上製・五六八頁／本体九、〇〇〇円



近代日本で行われた「記念植樹」を、個別の歴史事象、林学の創成と展開など時代背景と照合しながら、その活動の主導的立場にあり、方法論を構築した林学者・本多静六に注目し、彼の生家の富士山信仰・不二道の思想的影響も視野に入れながら、近代国家形成のあゆみに記念植樹を位置づける。

ウエルズ恵子（立命館大学教授）編

ヴァナキュラー文化と現代社会

A5判上製・三三六頁／本体六、〇〇〇円



「ヴァナキュラー (vernacular) 文化」とは、ある集団の人々の生活に深く関連した文化と、特定の時期や時代や状況や土地で発生した文化、および、そうした文化の底流となっている伝統を指す。文化人類学・民俗学、文学、歴史学などヴァナキュラー文化研究を牽引する日米執筆者による実験的な学術論考15篇。

大塚和義編

北太平洋の先住民交易と工芸

交易ルートの実態を明かし、工芸芸術を紹介する全34編

本体二、八〇〇円

鈴木達也著

世界喫煙伝播史

新大陸から諸地域へと伝播したタバコと喫煙について考察

本体八、五〇〇円

椎名仙卓著

明治博物館事始め〔オンデマンド版〕

明治初期、次々と誕生した博物館の興味深い挿話を紹介

本体四、八〇〇円

金谷美和著

布がつくる社会関係

— インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌 —

本体六、二〇〇円

2020年冬〜2021年春 主な刊行予定

近世歌舞伎と演劇書

廣瀬千紗子著

図説 内国勸業博覧会(仮)

橋爪紳也著

中世禅宗の儒学学習と科学知識

川本慎自著

鈴木大拙を顧みる(仮)

山田奨治、ジョン・ブリン編

占領下日本の地方都市

― 接収された住宅と都市空間 ―

大場修編

戦前期海軍のPR活動と世論

中嶋晋平著

住友史料叢書 35

住友史料館編

蘆庵本歌合集(龍谷大学善本叢書)

安井重雄責任編集

刺繍の近代 ― 輸出刺繍の日欧交流史 ― (仮)

松原史著

硫黄と銀の室町戦国

鹿毛敏夫著

法隆寺史中

法隆寺編

園城寺の仏像

第五卷 南北朝〜桃山彫刻篇

園城寺の仏像編纂員会編

空想から計画へ

― 日本近代都市に夢が埋もれるとき ―

中川理編

『今昔物語集』の成立と対外観

荒木浩著

キモノ図案からプリントデザインへ

― GHQの繊維産業復興政策 ―

牧田久美著

並河靖之と明治の七宝業

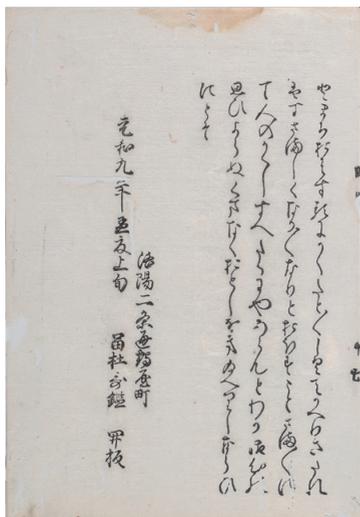
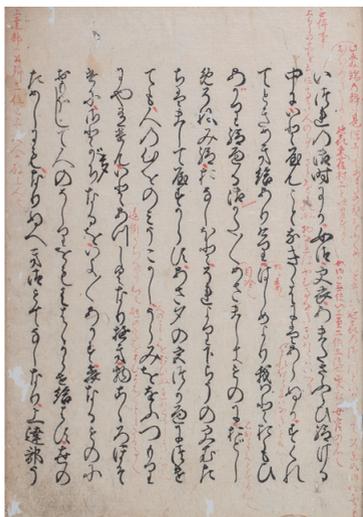
武藤夕佳里著

興福寺に鳴り響いた音楽 ― 教訓抄の世界 ―

磯水絵編

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁



源氏物語 五十四冊

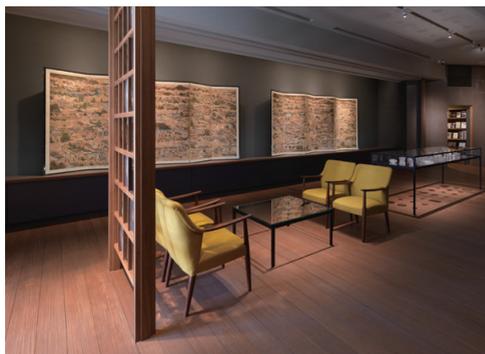
『源氏物語』は紫式部作の物語文学。平安中期成立。我が国文学の最高峰と称される作品である。

本書は、元和九年富杜哥鑑刊行の古活字版。水浅葱色の表紙を付し、その中央に枯色の題簽を貼り、各巻名を記す（一部打ち付け書きの巻もあり）。

版式は無辺無界、平仮名交じり十一行字数不等二十一・二字語。版心はなく、「六 二十」のような喉丁付となっている。「夢の浮橋」の末に「元和九年孟夏上旬／洛陽二条通鶴屋町／富杜哥鑑 開板」との刊記がある。「桐壺」「帚木」には朱句読点とともに、語釈に関する詳細な朱書入がみられ、『弄花抄』と『細流抄』を多く引用し、『史記』『後漢書』、『花鳥余情』や『紹巴抄』も参照しているようである。

『源氏物語』の古活字版は四種に大別されるが、そのいずれも完本は少ない。本書は元和九年富杜哥鑑版の完本であり、まさに稀観の書といえよう。また、本書は古活字版『源氏物語』で唯一、刊年と版元を明記する版で、かつ刊年の明確な最古の『源氏物語』版本である。処々に虫損と一部浸み跡がみられるものの、伝本極稀の古活字版有刊記本として、また『源氏物語』版本の歴史における明確な指標となる作品として、その価値は測り知れない。

（思文閣出版古書部・中村知也）



我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU
思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 531-0001 FAX(075)531-5533
<https://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録



ウンスンカルタ 三枚

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL (075) 752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

思文閣 SHIBUNKAKU
ONLINE SHOP



思文閣オンラインショップ
shop.shibunkaku.co.jp



ぎやらしい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらしい、思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386
TEL (075) 761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/